

西夏錢銘文の変遷と西夏の国情

吉池孝一

1. 序言

中国歴代の貨幣の銘文には「年号など+貨幣の呼称」からなっているものがある。貨幣の呼称とは、通宝、元宝、重宝などである。そこで宋と遼と西夏と金の、漢字の銘文を持つ貨幣(漢字錢)の呼称をみると、その用法に異なる面のあることに気づく。すなわち、宋と金の漢字錢には通宝と元宝と重宝の三種があるけれども時期による顕著な使用の傾向は認められない。これに対して遼の漢字錢と西夏の漢字錢は、ある時期を境にして通宝から元宝へと貨幣の呼称の切り替えがなされる。いずれの呼称を使用しても良いというわけではなさそうであり、貨幣の呼称の選択には一定の意図が働いているようにみえる。以上は漢字錢の話である。つぎに西夏で発行された西夏文字の銘文を持つ貨幣(西夏文字錢)を時代別に並べてみると、宝錢→元宝→宝錢というように、やや変則的な移り変わりをみせる。貨幣の呼称の選択が国策の一つであるからには、このような西夏文字錢の貨幣の呼称の変遷には西夏の何らかの国情が反映していると考えてもそれほど荒唐無稽なことではなからう。そのようなことを述べるのが本稿の目的である¹。

次節では、まず宋遼西夏金の漢字錢の呼称を確認し、ついで西夏の西夏文字錢の呼称を確認する。

2. 宋の漢字錢

宋の漢字錢には以下のものがある²。

北宋

・・・省略・・・

明道元宝(明道年間 1032-1033 年)³

景祐元宝(景祐年間 1034-1038 年)

皇宋通宝(宝元年間 1039 年始鑄)

康定元宝(康定年間 1040-1041 年)

慶歴重宝(慶歴年間 1041-1048 年)

至和元宝・至和通宝・至和重宝(至和年間 1054-1056 年)

嘉祐元宝・嘉祐通宝(嘉祐年間 1056-1063 年)

治平元宝・治平通宝(治平年間 1064-1067 年)

熙寧元宝・熙寧重宝・熙寧通宝(熙寧年間 1068-1077 年)

¹ 西夏文字錢における宝錢から元宝への変更が西夏の国情を反映したものであるという点については吉池 2002a で述べたことがある。小稿は宋・遼・西夏・金の漢字錢の呼称の変遷について補充し、前稿の考えを幾分なりとも補強したつもりである。また、宝錢から元宝に変更され、その後元宝から宝錢に戻ったという点については、前稿とはやや異なる考えを提出した。

² 国家文物局『中国古錢譜』編撰組 1989 参照。

³ 西暦は方詩銘 1980 に拠った。以下同様。

元豊通宝(元豊年間 1078-1085 年)
元祐通宝(元祐年間 1086-1094 年)
紹聖元宝・紹聖通宝(紹聖年間 1094-1098 年)
元符通宝・元符重宝(元符年間 1098-1100 年)
建国通宝(建中靖国元年 1101 年)、聖宋元宝・聖宋通宝[希少]⁴(建中靖国元年 1101 年)
崇寧通宝・崇寧元宝・崇寧重宝(崇寧年間 1102-1106 年)
大觀通宝(大觀年間 1107-1110 年)
政和通宝・政和重宝(政和年間 1111-1118 年)
重和通宝(重和年間 1118-1119 年)
宣和通宝・宣和元宝(宣和年間 1119-1125 年)
靖康通宝・靖康元宝(靖康年間 1126-1127 年)
南宋
建炎通宝・建炎元宝・建炎重宝(建炎年間 1127-1130 年)
紹興元宝・紹興通宝(紹興年間 1131-1162 年)
隆興元宝・隆興通宝(隆興年間 1163-1164 年)
乾道元宝・乾道通宝(乾道年間 1165-1173 年)
淳熙元宝・淳熙通宝(淳熙年間 1174-1189 年)
紹熙元宝・紹熙通宝(紹熙年間 1190-1194 年)
慶元通宝・慶元元宝(慶元年間 1195-1200 年)
嘉泰通宝・嘉泰元宝(嘉泰年間 1201-1204 年)
開禧通宝・開禧元宝(開禧年間 1205-1207 年)
嘉定通宝・嘉定元宝(嘉定年間 1208-1224 年)
・・・省略・・・

漢字銭の呼称には通宝と元宝と重宝があり、そのいずれが使用されるかについて顕著な傾向は見られない。

3. 遼の漢字銭

遼の漢字銭には以下のものがある⁵。

天賛通宝(天賛年間 922-926 年)

天顯通宝(天顯年間 926-938 年)

会同通宝(会同年間 938-947 年)

天祿通宝(天祿年間 947-951 年)

応歴通宝(応歴年間 951-969 年)

保寧通宝(保寧年間 969-979 年)

統和元宝(統和年間 983-1012 年)

重熙通宝(重熙年間 1032-1055 年)

* 助国元宝・牡国元宝(道宗朝 1055-1101 年)

⁴ 聖宋通宝は希少であるという。朱 活 1995 の 94 頁参照。

⁵ 『中国銭幣大辞典』編纂委員会 2005 参照。

清寧通宝 (清寧年間 1055-1064 年)

咸雍通宝 (咸雍年間 1065-1074 年)

大康通宝・大康元宝(大康年間 1075-1084 年)

大安元宝(大安年間 1085-1094 年)

寿昌元宝(寿昌年間 1095-1101 年)

乾統元宝(乾統年間 1101-1110 年)

天慶元宝(1111-1120 年)

統和年間(983-1012 年)に統和元宝があり、大康年間(1075-1084 年)に通宝と元宝の両者があるけれども、貨幣呼称の使用の傾向としては、大康以前は通宝であり大康以後は元宝であるとする事ができよう。

4. 西夏の漢字銭

西夏の漢字銭には以下のものがある⁶。

大安通宝(大安年間 1075-1085 年)

元徳通宝・元徳重宝(元徳年間 1119-1127 年)

大徳通宝(大徳年間 1135-1139 年)

天盛元宝(天盛十年, 1158 年始鑄)⁷

乾祐元宝(乾祐年間 1170-1193 年)

天慶元宝(天慶年間 1194-1206 年)

皇建元宝(皇建年間 1210-1211 年)

光定元宝(光定年間 1211-1223 年)

元徳年間に重宝がみられるけれども、漢字銭の呼称は、ほぼ天盛十年(1158 年)の前は通宝、天盛十年以降は元宝といえよう。漢字銭の呼称は天盛年間を堺にして截然と分かれるのである⁸。

5. 金の漢字銭

金および齊の漢字銭を挙げると次のようである⁹。

阜昌元宝・阜昌通宝・阜昌重宝(齊・劉豫の阜昌年間 1130-1137 年)

正隆元宝(正隆年間 1156-1161 年)

大定通宝(大定年間 1161-1189 年)

泰和通宝・泰和重宝(泰和年間 1201-1208 年)

崇慶元宝・崇慶通宝(崇慶年間 1212-1213 年)

至寧元宝(至寧年間 1213 年)

⁶ 『中国錢幣大辞典』編纂委員会 2005 参照。

⁷ 『宋史・夏国伝』に“宋高宗紹興二十八年、始立通濟監鑄錢”とある。宋の紹興二十八年は西夏仁宗の天盛十年に当たる。この年に仁宗は始めて通濟監を立て貨幣の鑄造を行った。『中国錢幣大辞典』編纂委員会 2005 の 75 頁参照。

⁸ もっとも眞贋不詳の貨幣として鞏都元宝(鞏都年間 1057-1062 年)がある。『中国錢幣大辞典』編纂委員会 2005 の 412-413 頁参照。

⁹ 『中国錢幣大辞典』編纂委員会 2005 参照。

貞祐元宝・貞祐通宝(貞祐年間 1213-1217 年)

漢字銭の呼称に通宝と元宝と重宝があり、そのいずれが使用されるかについては先の宋と同様に顕著な傾向は見られない。

6. 遼と西夏の漢字銭の特徴

宋と金の漢字銭には通宝と元宝と重宝の三種がある。この三種の使用について時代による顕著な使用の傾向は認められない。それに対して遼の漢字銭と西夏の漢字銭はともにある時期に通宝から元宝へと呼称の切り替えがなされ、いずれを使用しても良いというわけではなさそうであり、呼称の選択に一定の意図が働いているようにみえる。別の言い方をすれば、遼と西夏にあっては、国策の一つである貨幣の呼称に変更があるばあい、そこに何らかの意味を見つけ出すことができるということでもある。遼では大康年間(1075-1084 年)に通宝より元宝に切り替えとなり、西夏では天盛年間(1149-1169 年)に通宝より元宝に切り替えとなった。西夏は、一足遅れて遼に従っているようにみえるけれども、このような切り替えの背景について、今のところ明らかにすることはできない。いっぽう西夏の西夏文字銭については、これから述べるように、貨幣の呼称の変更についてその背景を推測することができそうなのである。

7. 五種の西夏文字銭

これまでに発見された西夏文字銭は五種。いま五種の西夏文字銭を古代文字資料館所蔵品の拓影で示す。その銭名は漢語に訳した銭名にしたがう。次いで銘文の読みを確認する。



①*福聖宝銭



②大安宝銭



③貞觀元宝



③' 貞觀元宝 (行書風)



④乾祐宝銭



⑤天慶宝銭

古代文字資料館蔵銭拓影(吉池採拓)

8. 銘文の読み

①*福聖宝銭(福聖承道年間 1053-1056 年)の読みは以下のとおり。羅福萇『西夏国書略説』(1914 年)は、当該銭の上を聖、右を福とし、福聖という漢語に当て、全体を福聖宝銭と読

んだ。これは西夏国年号の福聖承道の福聖であり、この読みによるならば聖と福は倒置されていることになる。しかしながら、上を彖(2544. 聖)¹⁰、右を𠄎(2342. 福、佑)とした場合、実物の字形とは異なる部分が生じる。下と左については𠄎(5655. 宝)と𠄎(1604. 錢)を崩した字形とみて大過ないであろう。その後、陳炳應 1989 は上と右の文字は福聖には見えないとし、漢語としては稟德宝錢とすべきであるとした。この稟德(德を受け継ぐ)にあたる西夏語は『番漢合時掌中珠』(乙種本二十七丁裏)にも出てくるもので、それによると第一字目が𠄎(2748. 德)、第二字目が𠄎(2135. 稟[動詞])ということになる。たしかにこちらのほうが当該の西夏文字錢の字形に近いけれども、実物の第一字目と𠄎(2748. 德)とは異なる部分がある。このように“福聖”という読みには未解決の問題があるけれども、当面は実物と彖(2544. 聖)𠄎(2342. 福、佑)との相違については崩し字形に起因すると見なし、*を附して*福聖宝錢と読んでおくしかないであろう。

②大安宝錢(大安年間 1075-1085 年)の読みは以下のとおり。上は𠄎(4456. 大)、右は𠄎(0139. 安、泰、利、善、易)、下は𠄎(5655. 宝)、左は𠄎(1604. 錢)。当該の貨幣は縁が広い大ぶりのもの(潤縁大様)である。文字部分の摩滅が進んでいるけれども大安宝錢として問題はない。

③貞觀元宝(貞觀年間 1101-1113 年)の読みは以下のとおり。上は𠄎(2748. 德、正、貞、平、靜)、右は𠄎(5593. 觀、瞻、看[動詞])、下は𠄎(5655. 宝)。この拓影(楷書体)によるかぎり左の字形の確認は難しいが、参考に付した貞觀元宝(行書風)により𠄎(0856. 根本、根源)であることがわかる。この文字は『番漢合時掌中珠』(乙種本三十四丁表)の中で“迴歸本家”という漢語の“本家”の“本”に対応する西夏文字として確認することができる¹¹。なお、貞觀元宝については、趙權之 1940 が初めて公にした折には貞觀宝錢と読んだが¹²、その後、彭信威 1958(547 頁)は貞觀宝元と読んだ。彭氏によると、年号に後置する呼称につき、西夏語としては宝元と並んでいるがそれは形容詞が名詞に後置する西夏語の特徴によるもので、漢語としては宝元と読めるという。近年では、史金波・白濱・吳峰雲 1988(29 頁)が貞觀元宝という読みを採用している。本稿も元宝とする¹³。

④乾祐宝錢(乾祐年間 1170-1193 年)の読みは以下のとおり。上は𠄎(3950. 天、乾)、右は𠄎(0645. 祐、助[動詞])、下は𠄎(5655. 宝)、左は𠄎(1604. 錢)。当該貨幣の拓影下字の左側部分は摩滅のため確認が困難であるけれども乾祐宝錢として問題はない。

⑤天慶宝錢(天慶年間 1194-1206 年)の読みは以下のとおり。上は𠄎(0510. 皇、天)、右は𠄎(0305. 慶[動詞])、下は𠄎(5655. 宝)、左は𠄎(1604. 錢)。天慶宝錢として問題はない。

以上を要するに貞觀年間に発行された貨幣のみが元宝という呼称をもち、それ以外は全

¹⁰ 数字は李範文 1997 の文字番号、西夏文字フォントは『今昔文字鏡』による。

¹¹ 貞觀元宝(行書風)の詳細については吉池 2002b 参照。

¹² 趙權之 1940(23 頁)は、銘文の左は通常の錢を表わす文字とは全く異なっていると述べ、断定を控えながらも、それを錢の異体字とした。

¹³ 西夏の崇宗(乾順)一代に発行された貨幣として合計三種発見されている。まず、貞觀元宝(1101-1113 年。西夏文字錢)が発行され、その後、元徳通宝(1120-1126 年。漢字錢)と元徳重宝(同。漢字錢)が発行された。これで崇宗(乾順)一代の間に、元宝と通宝と重宝という三つの常用の貨幣の呼称が出揃ったことになる。これは、貞觀を冠する西夏文字錢の貨幣の呼称を元宝と見なしうる根拠の一つともなる。

て宝銭であり、宝銭→元宝→宝銭と変遷することがわかる。

9. 西夏の西夏文字銭と漢字銭

以下は西夏で発行された貨幣の表であり宮澤 2007(258 頁)の表 5 を参照したが、そこで使用されている西夏文字銭の貨幣呼称の一部を改めた。すなわち、「貞観宝銭」とあるところは前節にしたがって「貞観元宝」に改めた。次節以降はこの表に沿って議論する。

	西夏文字銭	漢字銭
景宗		
毅宗	福聖宝銭(1053-1056)	
惠宗	大安宝銭(1075-1085)	大安通宝(1075-1085)
<hr/>		
崇宗	貞観元宝(1101-1113)	
		元徳通宝・元徳重宝(1119-1127)
		大徳通宝(1135-1139)
<hr/>		
仁宗		天盛元宝(1149-1169)
	乾祐宝銭(1170-1193)	乾祐元宝(1170-1193)
桓宗	天慶宝銭(1194-1206)	天慶元宝(1194-1206)
襄宗		皇建元宝(1210-1211)
神宗		光定元宝(1211-1223)

10. 宝銭から元宝へ

西夏文字銭の銘文は「年号+貨幣の呼称」よりなっている。その貨幣の呼称は宝銭と元宝の二種であるが、前節の表をみると、*福聖宝銭と大安宝銭までが宝銭であり、貞観元宝で元宝に変更となり、その後乾祐宝銭と天慶宝銭で宝銭に戻っている。ふつう貨幣の銘文に用いられる字形や表現形式は発行者により入念に検討されるから、そこに変更がある場合、その変更には発行者の何らかの意図が反映されるはずである。ここで検討している西夏文字銭は公的機関の発行になるものであるから、宝銭から元宝への変更には何らかの政治的な意図が反映されていると想定するのが本稿の立場である。

さて、鐘侃・呉峰雲・李範文 2001 によると、西夏国の崇宗(乾順)の永安二年(1099 年)に、これまで実権を握っていた乾順の実母梁太后が没しこれより乾順は親政を敷くことになった。その政策は遼に依存し宋とは和解政策をとるものであり、文化面では蕃学のほかに国学(漢学を重視する)を建て漢文化を受け入れる道を開いたという¹⁴。いま問題としている西夏文字銭の貞観元宝は、貞観という銘文よりみて、ちょうどこの政策に着手した貞観年間(1101-1113 年)に発行されたものである。貞観年間の初期に、これまで使用していた宝銭(𐽀(5655. 宝)𐽁(1604. 銭))という西夏特有の貨幣呼称を、これを契機に元宝(𐽀(5655. 宝)𐽂(0856. 根本、根源))という中国的な呼称に切り替えたと思われるのである。それではな

¹⁴ 鐘侃・呉峰雲・李範文 2001 の 62-64 頁参照。

ぜ漢字銭の通宝や重宝に相当する呼称とせず、元宝に相当する𦉑(5655. 宝)𦉑(0856. 根本、根源)としたのかということが問題となろう。おそらくは遼の漢字銭の元宝に倣ったものであろう。遼では大康年間(1075-1084年)以降は全て元宝とされていた。あるいは、西夏の貞観初年に相当する時期に宋と遼で発行された漢字銭がありそれに倣ったものであるかもしれない。西夏国の貞観年間(1101-1113年)は、遼・天祚帝の乾統年間(1101-1110年)に相当するわけであるが、遼では天祚帝即位時(1101年)の年号を銘文とする漢字銭の乾統元宝が発行された¹⁵。また、宋・徽宗は即位翌年の建中靖国元年(1101年)に漢字銭の聖宋元宝が発行された。もしも西夏の貞観元宝(西夏文字銭)が貞観年間の早い時期に発行されたとしたならば、遼と宋と西夏はほぼ同時期に元宝という貨幣呼称をもつ貨幣を発行したことになる。すなわち、遼は乾統元宝(漢字銭)を、宋は聖宋元宝(漢字銭)を、西夏は貞観元宝(西夏文字銭)を発行した。いずれにしても、西夏特有の貨幣呼称から中国的な呼称への切り替えと、西夏の崇宗(乾順)が貞観年間に進めた遼との関係強化や宋との和解政策および漢学新興との間には一定の関係があるとみるのである。

11. 元宝から宝銭へ

その後、崇宗の長子である仁宗の乾祐年間には乾祐宝銭(西夏文字銭)と乾祐元宝(漢字銭)が発行され、崇宗の長子である桓宗の天慶年間には天慶宝銭(西夏文字銭)と天慶元宝(漢字銭)が発行された¹⁶。西夏文字銭については再び「～宝銭」に戻った。なぜ戻ったのか、その理由を推定する十分な根拠はないけれども、第9節の表によると、西夏文字銭と漢字銭における銘文表現の使い分けがなされているようにみえる。すなわち、西夏文字銭には民族固有の宝銭という表現を使用し、漢字銭には中国的な元宝を使用するというものである。

12. 結語

西夏文字銭の銘文は「年号+硬貨呼称」よりなっている。その貨幣の呼称には宝銭(𦉑(5655. 宝)𦉑(1604. 銭))と元宝(𦉑(5655. 宝)𦉑(0856. 根本、根源))の二種があり、時代を追って宝銭→元宝→宝銭と変遷する。すなわち、①*福聖宝銭(福聖承道年間 1053-1056年)、②大安宝銭(大安年間 1075-1085年)、③貞観元宝(貞観年間 1101-1113年)、④乾祐宝銭(乾祐年間 1170-1193年)、⑤天慶宝銭(天慶年間 1194-1205年)となる。①②の宝銭から③の元宝への変化は貞観年間のできごとであり、西夏の崇宗(乾順)が貞観年間におこなった遼との関係強化や宋との和解政策、および漢学新興と一定の関係があるとみる。③の元宝から④⑤の宝銭への揺り返しの根拠は充分ではないけれども、西夏文字銭の方には民族固有の宝銭という表現を使用し、漢字銭の方には中国的な元宝を使用するという銘文の整理がなされたことは見て取ることができよう。

参考文献(発行年順)

¹⁵ 朱活 1995 の 92-123 頁を参照。

¹⁶ 牛達生 1984 の 26 頁による。

- 羅福萇 1914. 『西夏国書略説』 東山学社印。
- 趙權之 1940. 「介紹新發現一種西夏文錢」, 『泉幣』 3, 22-23 頁。
- 彭信威 1958. 『中国貨幣史』 上海: 上海人民出版社(第一版 1958 年。1988 年第 3 次印刷本による)
- 方詩銘 1980. 『中国歴史紀年表』 上海: 上海辞書出版社。
- 史金波・白濱・吳峰雲 1988. 『西夏文物』 北京: 文物出版社。
- 牛達生 1984. 「西夏錢幣弁証」, 『中国錢幣』 1984-4, 20-27 頁。
- 陳炳應 1989. 「關與西夏錢幣的幾個問題」, 『中国錢幣』 1989-3, 18-23 頁。
- 国家文物局『中国古錢譜』編撰組 1989. 『中国古錢譜』 北京: 文物出版社。
- 朱 活 1995. 『古錢小辞典』 北京: 文物出版社。
- 李範文 1997. 『夏漢字典』 北京: 中国社会科学出版社。
- 鐘侃・吳峰雲・李範文 2001. 『西夏簡史(修訂本)』 銀川: 寧夏人民出版社。
- 吉池孝一 2002a. 「貨幣文字考—西夏錢—」, 『東洋哲学研究所紀要』 17 号, 82-94 頁。
- 吉池孝一 2002b. 「西夏文銅牌及び白銅錢の紹介」, 『慶谷壽信教授記念中国語学論集』 東京: 好文出版, 221-222 頁。
- 『中国錢幣大辞典』編纂委員会 2005. 『中国錢幣大辞典 宋遼西夏金編・遼西夏金卷』 北京: 中華書局。
- 宮澤知之 2007. 『中国銅錢の世界—錢貨から經濟史へ—』 京都: 思文閣出版。